

研究プロジェクト成果報告書（一般研究・特別研究）

研究課題 「遊び込む子ども—教育課程の創造—」

研究期間 平成28年度～平成29年度

研究代表者	上越教育大学附属幼稚園	園長	杉浦 英樹
	同	園長	木村 吉彦(平成28年度在籍)
研究組織	同	副園長	平間 えり子
	同	教諭	渡邊 典子
	同	教諭	亀山 亨
	同	教諭	大坪 千恵子
	同	養護教諭	加藤 喜美江
	上越教育大学	准教授	角谷 詩織
	同	准教授	白神 敬介

■研究の概要

1 研究テーマについて

本園では、幼児の主体的な遊びの経験を保障し、幼児なりに力を発揮しながら思いや願いを実現させていく幼児主体の保育実践を行っている。そして、遊びを通して生きる力の基礎が育成されるよう、環境を構成し援助することを大切にしている。

その遊びを一層充実させ、より質の高いものにしたいと考え、平成25～27年度に「遊び込む子ども一学びの基盤に着目して」というテーマを設定し、研究に取り組んだ。平成25年度（第1年次）には、当園における「遊び込んでいる遊び」を定義しようと試んだ結果、そこには幼児の「没頭」「試行錯誤」「協同（4歳児～）」の3つの様相が必ず含まれていることが分かった。平成26年度（第2年次）には、幼児の遊び込む姿を支える教師の援助と環境構成を探った。遊び込んでいる幼児の内面には、「安心感」を土台として「自信・達成感」「意欲の持続」「気付き・思考の深まり」「仲間とかかわりあう心地よさ（4歳児～）」が生み出されており、遊びが停滞していると感じたときには、幼児の内面に足りないものは何かを考え、それらを生み出すような環境づくりや言葉かけなどの援助が大切であることが分かった。平成27年度（第3年次）には、遊び込んでいるときに幼児が包まれている雰囲気のことを、「遊び込みの空気」と名付けた。そして、その空気に包まれて遊ぶ経験を積み重ねることによって、「がんばる力」「かんがえる力」「よりよくかかわる力」「ことばの力」の4つの力が、絡み合い、総合的に育まれるのではないかということが見えてきた。

平成27年8月26日の中央教育審議会教育課程企画特別部会の論点整理には、「幼児期において、探究心や思考力、表現力に加えて、感情や行動のコントロール、粘り強さ等のいわゆる非認知能力を育むことがその後の学びと関わる重要な点であると指摘されていることを踏まえ、小学校の各教科等における教育の単純な前倒しにならないよう留意しつつ、幼児期の終わりまでに育てほしい姿の明確化を図ることや、幼児教育にふさわしい評価の在り方を検討するなど、幼児教育の特性等に配慮しながらその内容の改善や充実が求められる」とある。

これまでの研究成果から、「遊び込みの空気」に包まれて遊ぶ経験を積み重ねることによって、上述にあるような非認知能力が育まれることは明らかである。また、そのような経験を積み重ねた幼児は、小学校以降の学習に対しても様々な社会的変化にも、自分や他者、対象となるものを肯定的に受け止めながら問題を解決していく方法を主体的に見出すことが期待できる。

そこで、本研究では、遊び込む子どもの姿を手がかりとしながら、遊び込む幼児の姿とそれを支える教師の援助と環境構成を分析することにより、従来の教育課程を見直し再編成を行う。これからの新しい時代を自らの力で生き抜く子どもを育む教育課程を提案できるのではないかと考える。

2 研究計画

第1年次（平成28年度）

- ①平成25～27年度に蓄積した事例をもとに、教育課程および年間指導計画の素案を作成する。教育活動については「遊び」「みんなでかかわる活動」「生活行動」のうち、「遊び」の項目について見直す。
- ②指導資料（担任が作成する週の教育計画と振り返り）の蓄積と遊び込んだ事例の収集を行い、教育課程および年間指導計画の素案作成に活かす。

第2年次（平成29年度）

- ①これまでの指導計画や平成25年度から蓄積した事例や指導資料をもとに、教育活動の項目のうち「みんなでかかわる活動」「生活行動」の見直しを行う。
- ②指導資料（担任が作成する週の教育計画と振り返り）の蓄積と遊び込んだ事例の収集を行い、教育課程および年間指導計画の素案作成に活かす。

3 研究方法

（1）平成25年度から蓄積した事例や指導資料の整理および分析

幼児の遊び込んだ事例や「みんなでかかわる活動」「生活行動」における学級全体や個のエピソード、週案等の指導資料をもとに、年間指導計画の修正や見直しを行う。

（2）週案による指導資料の蓄積

日々の保育を考える際の具体的な資料として、週案を活用する。1週間の活動の計画を立てるとともに、幼児の姿や教師の援助など、保育の振り返りを記録する。

（3）カンファレンスの実施

遊び込んだ事例や「みんなでかかわる活動」をまとめたレポートを持ち寄り、保育を参観された本学の大学教員を交える、実際に幼児が遊んだ跡を見ながら遊びについて語り合う等、様々な形式で実施する。研究の進め方や事例の捉え方については、研究協力者である大学教員から助言をいただく。

（4）研究保育と研究会の実施

研究保育では、研究協力者から定期的に保育を参観していただき、本園の研究について助言をいただく機会とする（年2回）。また、幼児教育研究会を実施し、研究協力者や参会者から意見をいただいたり、幼児教育関係者から講演していただいたりすることを通して、研究の方向や保育の新たな視点を得る場とする。

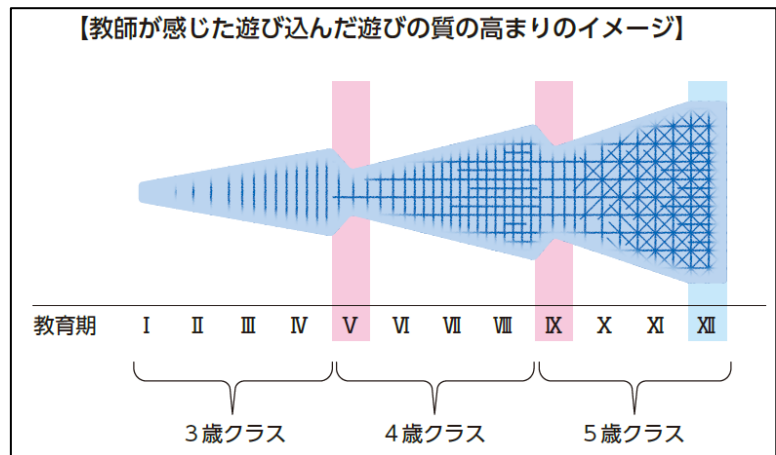
4 研究の成果と課題

2年間の研究を経て、従来の教育課程および年間指導計画を後述のように再編成した。しかし、それらの有効性を検証するまでには至っておらず、今後も作成した素案に沿って実践を進めながら見直しや修正をする必要がある。

また、研究を進めていく中で、以下の6点が見えてきた。

- （1）遊び込んだ遊びは、年齢が進むにしたがって複雑になったり高度になったりして、その質が高まっていくものと考えていた。しかし、4歳クラスと5歳クラスの始めの期（4月～5月中旬）は、遊びの質が高まることなく、前の期と比べると

少ししぼむような感じを受けた（下図）。そこには、進級による環境の変化が関係しているのではないかと考えた。幼児にとってこの時期は、成長する喜びや自信と、新しい環境や人間関係に適応していく不安が入り混じっている。たとえ在園児であっても、教師が思っている以上に不安感を抱いており、遊びに夢中になれるような安心感や、したいことを次々と思い付き試そうとする自信や意欲が不足している状態であることが推測できる。教師は、この時期にその年齢クラスらしい姿が見られなくても、焦らずに、幼児が安心感をもって新しい環境に適応するまでじっくりとかかわることが大切である。



- (2) 5歳クラスの最後の期には、新しい遊びをつくっていくという姿はほとんど見られず、遊びの質も停滞しているような感じを受けた。それは、毎年2月中旬に行われる発表会に向けての取組が関係しているのではないかと考えた。発表会は、それぞれのクラスが自分の楽しんだ遊びの中からみんなに見てもらいたいことを発表する場であるが、5歳クラス児になると、遊びの時間の中で自分が発表することを自主的に練習するようになる。その姿からは、発表会を大きな目標と捉えて、よりよい発表にするために友達と話し合いながら、見通しを持って取り組んでいるという感じを受ける。教師が5歳クラス児の発表会に向けたこのような取組を遊び込んでいると捉えないため、図のように遊びが停滞しているように見えるが、この期は、遊び込みによって何かを身に付けるというより、これまでに身に付けた力を普段の生活で繰り返し使い定着させている時期であると考えられる。
- (3) 「みんな」の時間に行っている活動は、3歳クラスが少なく、5歳クラスが最も多かった。それは、年齢を重ねるにしたがってクラス全員でできる活動が増えるということを示しており、年間指導計画の「みんな」の欄の大きさがそれを表している。逆に、「せいかつ」においては、年齢が低いほど教師が身に付けてほしいと促す行動や活動が多くなった。「あそび」は、幼児は園の環境に慣れ自発的に遊びを展開していくことができるようになるため、年齢を重ねるにしたがって教師の援助が次第に少なくなる傾向にあった。
- (4) 「みんな」と「せいかつ」の活動内容を検討していく中で、3歳クラスⅡ期までのおやつ活動と帰りの集まりは、「みんな」に含むのではなく「せいかつ」に含むほうが幼児の実態に即しているのではないかと見えてきた。3歳クラスでは、入園してからしばらく、おやつを食べることをきっかけにして、幼児が午前の遊びに区切りを付け片付けることができるように促すことが多くある。また、園は家庭とは違う集団で生活をするため、食べる時のきまりやマナーがある

ことを知り、友達と楽しい時間を過ごせるようになることがこの時期に重視したいねらいでもある。したがって、3歳クラスにとっておやつを食べることは、園の生活リズムを身に付けるという色合いが濃くなるため、教育期のⅡ期までは「せいかつ」に、Ⅲ期からは「みんな」に位置付けた。同じように、帰りの集まりも、3歳クラスⅡ期までは降園する前のきっかけの活動として「せいかつ」に、Ⅲ期からは「みんな」に位置付けた。

- (5) 「みんな」において、活動内容や教師のねらいから「こんなふうに育ってほしい」という各期の教師が期待する幼児の姿を検討した結果、「あそび」で期待する幼児の姿と重なる部分が多くあった。教師は、季節感を味わうことをねらいとしている活動以外は、できる限り目の前の幼児の実態に合わせて「みんな」で行う活動内容を考えるようにしている。そのときの幼児の実態とは「あそび」での幼児の姿であることが多いため、結局は「あそび」が充実することにつながり、期待する姿も似てくるのだろうと考えた。
- (6) これまでの週案等の指導資料や事例から、幼児は、「みんな」の時間に行った遊びを「あそび」の時間でも楽しむ様子が見られることもあれば、夏野菜を植える活動を通して果物の種に興味をもったり動物に野菜を食べられないように対策を考えることに夢中になったりすることもある。それぞれの活動で教師のねらいはあるものの、その活動を通して現れる幼児の姿は、教師のねらいや予想を超えて実に様々で、一人一人によって違う。「みんな」の時間は一日の中でわずかな時間ではあるが、いろいろな対象に出会う体験を積み重ねていくことができるように、今後も活動内容を検討し、充実させていく必要がある。

教育課程（平成29年度版）

1 教育課程編成の基本方針

本園の置かれている状況と、これまでの研究成果を踏まえ、附属幼稚園としての役割や特徴、地域社会や保護者の期待、教師の願いを重ね合わせ、以下、教育課程編成の基本方針としています。

- 学校教育法と幼稚園教育要領の示す基本に従う。
- 本園の教育目標に向かい、幼児が心身共に健康で、生き生きと生活できる幼児教育の実現を目指す。
- 上越教育大学附属幼稚園としての研究を推進し、教育実習生を受け入れるという役割を果たせる基盤の確立を図る。
- 学校教育のスタートとしての幼児教育の重要性を踏まえ、小学校教育に何を発信し、接続していけばよいのかを追求し、教育課程の中に位置付けていく。
- 幼児教育の重要性を考え、それを支えている家庭や地域との連携を深める工夫を図る。

2 教育目標

元気な子ども	たくましい体力を育て、自然の中を元気に駆けめぐる幼児の育成を大切にしています。
やさしい子ども	自己を他との好ましい人間関係の中でとらえ、自己実現が図られるよう、やさしい子どもの育成を大切にしています。
考える子ども	自分なりに納得するまで考える、探究心旺盛な幼児の育成を大切にしています。

3 年度の重点目標

のびのびと体を動かし、精いっぱい遊ぶ子ども
自然に親しみ、友達と仲よく遊ぶ子ども
感じたことや考えたことを自分なりに表現する子ども

4 教育方針

- 入園から修了まで、2年間ないし3年間を見通した教育を行う。
- 遊びを中心とした、幼児の自発的な活動を支える園生活の具現に努める。
- 計画的・意図的な環境の構成により、適当な環境を通して行う教育の充実を図る。
- 幼児の思いや願いを受け止め、望ましい人間関係の基盤となる心の教育に努める。
- 自然体験など、直接的で具体的な体験を重視した教育に努める。
- 幼児の知的な興味関心を大切にし、意欲を刺激しながら、豊かな感性や表現の芽生えを培う。
- 担任と副担任で行うチーム保育の意義を考え、それを積極的に取り入れた教育に努める。
- 園生活における各種行事の意義を考え、年齢や幼児の発達のプロセスに応じた行事を計画的に位置付けていく。
- 園生活の様々な場面において、基本的な生活習慣が育成できる教育に努める。

5 1日の教育時間

登園 8:40～9:00 11:00 頃片付け ※水曜日はおやつを 食べて 12:00 降園 降園 14:00	<p>「あそび」の時間</p> <p>(砂遊び、ごっこ遊び、生き物探し、木の実採り、製作遊びなど 屋内でも屋外でも好きな場所でしたい遊びをして過ごす)</p> <p>「みんな」の時間</p> <p>(散歩、おやつ活動、ルールのある遊び、栽培、異年齢活動など)</p> <p>食べる時間</p> <p>(お弁当、給食)</p> <p>「あそび」の時間</p> <p>「みんな」の時間</p> <p>(遊びの振り返り、歌など)</p>
---	--

本園では幼児に寄り添った生活を旨とし、1日の生活リズムは「あそび」を中心として、ゆったりと流れて行くように配慮しています。また、幼児の活動の状況や各年齢クラスの計画に応じて、流動的に運営されており、上記に示す教育時間は平均的な例です。また、3歳クラスは、園生活に慣れるまで降園時刻が上記とは異なります。

6 主な年間行事予定表

	主な行事
4月	新任式 1学期始業式 入園式 お花見遠足(4歳クラス)
5月	なかよし遠足(異年齢活動) 避難訓練 附属小学校1年生との交流①(5歳クラス)
6月	運動会 バス遠足(4歳クラス)
7月	七夕遠足(全クラス) 七夕まつり 避難訓練 宿泊保育(5歳クラス) 附属小学校1年生との交流②(5歳クラス) 1学期終業式
9月	2学期始業式 避難訓練 バス遠足(4歳クラス)
10月	バス遠足(3歳クラス) なかよし遠足(異年齢活動) 交通安全教室
11月	附属小学校1年生との交流会③(5歳クラス) 祖父母参観 避難訓練
12月	2学期終業式
1月	3学期始業式 避難訓練 まゆ玉づくり 附属小学校1年生との交流会④(5歳クラス)
2月	豆まき会 お楽しみ発表会 避難訓練 雪遊び遠足(3、4歳クラス)
3月	5歳クラス児とのお別れ会 修了証書授与式 3学期終業式

7 教育課程表および年間指導計画について

(1) 教育課程の構造

①教育課程の時期区分

本園では、幼児の発達の節目や生活の節目を捉えて、発達の時期を年齢ごとに4つの「期」に区分しています。教育課程表や年間指導計画では、その期にふさわしい生活を構想し、前後を見通した上で、望ましい経験や活動を選んで園生活の中に位置付けています。また、幼児にとって進級することは、自分の成長を自覚し新しいクラスへの期待をもつと同時に、大きな不安も感じています。そこで、年度の切り替わりとなる学年始めを短い時期で一つの期ととらえ、幼児にとって無理なく新しいクラス環境に対応していけるように、援助を工夫しています。

小学校以降の生活や学習の基盤へ		
5歳クラス	Ⅻ期 (1月～3月) Ⅺ期 (9月～12月) Ⅹ期 (5月下旬～7月) Ⅸ期 (4月～5月中旬)	接続期 たかまる
4歳クラス	Ⅷ期 (1月～3月) Ⅵ期 (9月～12月) Ⅴ期 (5月下旬～7月) Ⅳ期 (4月～5月中旬)	ひろがる
3歳クラス	Ⅲ期 (1月～3月) Ⅱ期 (9月～12月) Ⅰ期 (5月下旬～7月) Ⅰ期 (4月～5月中旬)	なれる

②各年齢クラスにおける教育課程の捉えと幼児の育ち

幼児にとって幼稚園は、家庭を離れて集団生活を送る場です。3歳クラスは、およそ1年をかけて少しずつ園生活の流れを理解します。3歳クラス児にとって幼稚園は、安心して過ごせる居心地のよい場所として慣れ親しむ「なれる」時期と捉えています。この時期は、先生や友達と一緒に好きな遊びを十分楽しみます。

4歳クラスは、園環境や生活のリズムにも慣れ、次第に自分らしさを表出しながら多様な経験を学びとして蓄積し、仲間とイメージを共有しながら遊びが広がっていく「ひろがる」時期と捉えました。しかし、経験や獲得した学びがすぐに具体的な新たな学びの姿としてみられるのではなく、しばらく時期を経過してから学びの姿として表出する傾向があります。

5歳クラスは、3、4歳クラスで積み重ねてきた経験や学びを基盤として、さらに新しい学びを加味しながら園生活をより豊かなものにしていく「たかまる」時期と捉えました。3、4歳クラスの幅広い学びの蓄積が、5歳クラスにおける学びの基盤となっている事例が多く見られます。また、仲間とともに遊びをつくっていくようになります。

このように、「なれる」「ひろがる」「たかまる」は、あくまでも各年齢クラスの特徴的な学びの傾向を示すものであり、各年齢クラスにおける、その年齢なりの「なれる」「ひろがる」「たかまる」姿を見ることもできます。

③接続期および接続プログラム

5歳クラスの9月から小学校1年生の5月上旬までを幼小の「接続期」として設定し、「接続プログラム」を作成しました（「5歳クラス児の学び合い等に着眼したプログラム」「小学1年生との計画的な交流プログラム」「保護者向けプログラム」）。本園では接続期を「幼稚園生活で培ってきた力や育ちが、一層確かなようになるような経験を意識的に重ねていく時期」とし、大勢の幼児がかかわる遊びを通して、どの幼児にも確かな学びを保障したいと考えています。

④ねらいや内容を位置付けるための3つの活動

幼稚園教育要領のねらいを総合的に達成するために、幼児の一日の園生活を以下の観点で3つに分類し、それぞれを「あそび」「せいかつ」「みんな」と名

付けました。

「あそび」（従来の「遊び」）

幼児が、「あそび」の時間の中でする自由な活動のことです。幼児は、一日の園生活の大半をしたい遊びを楽しみながら過ごしており、こうした活動を「あそび」としています。例えば、砂場遊び、ごっこ遊び、製作遊び、虫探し、木の実採り、固定遊具遊びなど、園内の様々な場所で年齢クラス関係なく、自由にしたい遊びを楽しむ様子が見られます。本園の教育課程の中核をなす重要な活動です。

「みんな」（従来の「みんなでかかわる活動」）

幼児の育ちや対象との関係性から必要と思われる多様な体験を積み重ねるために、また個々の幼児の姿を踏まえて「あそび」がより豊かになることを期待して、教師が活動内容を決め、クラス全員または異年齢グループに提案して「みんな」の時間に行う活動のことです。緑の小道散歩、おやつ活動、ルールのある遊び、栽培、製作、プール遊び、異年齢活動など、主に季節感を味わったり集団で行う遊びを楽しんだりする活動を行います。修了への準備や附属小学校との交流活動など5歳クラスのみ活動もあります。各年齢クラスで活動するときにはクラスの名前を付けて「そらの時間」「やまの時間」「うみの時間」、異年齢活動は「なかよし活動」と呼んでいます。

例えば、季節感を味わうために、3歳クラスではおやつに旬の果物を食べたり、4、5歳クラスでは園内で採れた木の実を調理して食べたりする活動が行われます。教師の意図するところは同じでも、発達段階に応じて活動内容が異なります。また、「あそび」の時間に幼児がしていた遊びが深まることを期待して、帰りの集まりの際にその遊びに関する絵本を選んで読み聞かせをすることもあります。4、5歳クラスになると、ルールのある遊びの面白さや楽しさを味わうことを期待して、教師が提案したルールのある遊びをすることもあります。椅子取りゲームやカルタ、じゃんけんれっしゃ、しっぽ取りゲームなど、発達段階や幼児の育ちに応じて遊びの内容を計画します。5歳クラスになると、友達と一緒にルールのある遊びをすることを好む幼児が増え、この時間に行った遊びが「あそび」の時間の中でも見られるようになります。教師はそのような姿を捉えて、自分たちでルールをつくり出したり変更したりすることをねらいとした活動を計画します。幼児の興味や実態、「あそび」とのつながりを考慮し、幼児が主体的に取り組めるよう配慮しています。

「せいかつ」（従来の「生活行動」）

教師が幼児に、自分自身にかかわる生活習慣や、クラスや園内における様々な役割を身に付けてほしいと期待して、意図的に促す行動や活動のことです。例えば、食事の仕方やマナー、排泄、着替え、片付け、クラスの当番活動や動植物の世話などがあります。「あそび」や「みんな」などの教育時間にかかわらず、一日を通して行われます。

3歳クラスにおける帰りの集まりやおやつは、多様な体験を積み重ねるための活動というよりは、降園するためのきっかけを意識させるものであったり、

食事を摂るときの個々の支度や準備であったりと、「せいかつ」の側面が色濃い活動になります。年間指導計画において、3歳クラスのみ帰りの集まりやおやつの内容が「せいかつ」に記載されているのはそのためです。

上述の観点によって園生活の様々な活動や行動は大きく3つに分類されますが、それは指導計画を作成するための教師のねらいや意図から見た形式的な枠組みです。それぞれの活動や行動はこの観点によって切り離されるものではなく、複雑に関わり影響し合って園生活を構成しています。大切なのは、幼児にとって一日の園生活が意味ある体験のつながりになるようにすること、教師が提案した活動であっても幼児が対象とかかわる中で面白さや楽しさを感じられるようにすることです。

それぞれの分類におけるねらいや内容は、教育期ごとに決めました（後述の年間指導計画参照）。

(2) 年間指導計画について

以下の表のように年間指導計画を作成した（細枠は1年次研究、太枠は2年次研究において見直しを行った。各年齢クラスの年間指導計画については、本園平成29年度発行研究紀要を参照）

3歳クラス 年間指導計画 Ⅲ期(9月～12月)		幼児は	3-Ⅲ	教師は				
<p>無難の過程 好きな遊びをしながら、友達の間で遊ぶことを楽しむ時期 仲間関係の様相</p> <p>(四) 友達とかかわりながら、教師の言葉かけにより、相手の思いを知る</p> <p>(真) 年上の幼児から優しくされ、相手の思いを知る</p> <p>・活動範囲や遊びの種目が広がる。仲間や先生などとも幼児同士で遊ぶ姿が見られるようになる。運動会や遠足等の様々な行事を経験し、いろいろなことに取り組む姿が見られるようになる。新しい経験にも挑戦する。</p> <p>・言葉で自分の思いを伝えようとする気持ちが高まり、教師や友達の手を自分なりに理解しようとする。また、友達とかかわりながら相手の思いを受け入れて遊ぶようになる。同時に思いの食い違いからトラブルが起りやすくなる。</p> <p>・生活面はほぼ安定し、自分のことは自分で取り扱おうとする。</p>	<p>この時期の幼児は</p> <p>①</p>	<p>・身近な素材や素材などでつくりたいものをつくって遊ぶ。</p> <p>・砂や土、水、草花を使</p> <p>・友達や年上の幼児の遊</p> <p>・昆虫を追いかけたり、木の実などの自然物を集めて遊びに使うようにしたりする。</p>	<p>・使いやすい素材や紙粘土、布ガムテープなどの様々な素材や、はさみやのり、クレヨン、ペンなどの道具を、教師と一緒に使いながら慣れるようにする。</p> <p>・つくったものが遊びに活かされるような言葉かけをしたり、それらを使って教師が幼児と一緒に遊んだりする。</p> <p>・遊びの雰囲気が高まるようなものと一緒にじっくり考えたりする。</p> <p>・幼児の思いに応じて、身に付けるもの（ドレス、マント、かぶりもの）や小道具（靴、ステッキ）などを一緒に作り、友達と遊びをする楽しさが味わえるようにする。</p> <p>・幼児のしたいことを理解し、</p> <p>・年上の幼児のごっこ遊びに、</p> <p>・幼児と一緒に遊びに参加しながら、「まゆ」「晴音」「侍つ」ことができるような言葉かけをする。</p> <p>・道具や材料の種類や個数を調整しながら、分けた順番に使ったりする機会をつくる。</p> <p>・自然物に目を向けた幼児の発見や驚きに共感し、周りの幼児に伝える。</p> <p>・満足感が得られるように、捕まえた昆虫や集めた自然物を入れる容器を用意する。</p>	<p>・好きな遊びに夢中になり、その遊びを続けようとする。(あ)</p> <p>・したいことや遊びに必要なものを友達や教師に伝え、自分で道具をそろえたり、つくろうとしたりする。(あ)</p> <p>・友達と笑い合い、一緒に遊ぶ。(あ)</p> <p>・友達や年上の幼児の遊</p> <p>・秋から冬の自然の様子や変化に興味をもつ。(ま)</p> <p>・同年齢や年上の友達に関心をもち、かかわろうとする。(ま)(せ)</p> <p>・身に付けることと生活習慣を知り、自分のことは自分でしようとする。(せ)</p>				
					<p>こんなふうな遊びをしようとする</p> <p>②</p>	<p>・木の葉や落ち葉などの季節のものを使って、遊んだり飾りをつくらうとする。</p> <p>・緑の小道を散歩し、自然の中で遊ぶ楽しさを味わう。</p> <p>・昔ながらの遊び(カル</p> <p>・真年輪活動(なまよし</p> <p>・博りの集まりなどで歌</p> <p>・教師と一緒に遊んだ後の片付けをしようとする。</p> <p>・手洗いやうがい、歯磨きの大切さを知り、自分から進んで行う。</p> <p>・登場物の支度や食卓の準備や片付けを自分でしようとした</p>	<p>・季節を感じたり遊びが広がったりするように、園内にある木の葉や落ち葉を使った遊具の遊びができるように準備する。</p> <p>・クレヨンやはさみ、のりなどの道具を使う機会を設け、個別にかかわって使い方を徐々に指導していくようにする。</p> <p>・園内ではできない遊びや自然物との出会いが期待できるため、回数を重ねるようにする。</p> <p>・冬の園内遊びへの移行のき</p> <p>・活動を取り戻しながら、年</p> <p>・遊びや仲間が広がるように</p> <p>・季節を感じたり遊びが広がったりするように、今している遊びや季節に関する絵本や紙芝居を選ぶ。</p> <p>・季節を感じたり、秋の喜びを感じたりできるようにする。</p>	<p>・冬の内遊びへの移行のき</p> <p>・活動を取り戻しながら、年</p> <p>・心をもつようにする。</p> <p>・自分で紹介したりする場を設ける。</p> <p>・季節を感じたり遊びが広がったりするように、今している遊びや季節に関する絵本や紙芝居を選ぶ。</p> <p>・季節を感じたり、秋の喜びを感じたりできるようにする。</p>
					<p>だから教師は</p> <p>③</p>	<p>・教師と一緒に遊んだ後の片付けをしようとする。</p> <p>・手洗いやうがい、歯磨きの大切さを知り、自分から進んで行う。</p> <p>・登場物の支度や食卓の準備や片付けを自分でしようとした</p> <p>・道具、コート類の整理</p> <p>・当番の仕事に興味を示</p>	<p>・遊びや仲間が広がるように</p> <p>・季節を感じたり遊びが広がったりするように、今している遊びや季節に関する絵本や紙芝居を選ぶ。</p> <p>・季節を感じたり、秋の喜びを感じたりできるようにする。</p> <p>・自分が使ったものだけでなく、みんなで遊んだ場所も片付けるように促し、整理するよに気付くようにする。</p> <p>・自分の身体を守るための様々な生活習慣について、養護教諭の協力を得ながら、必要理由について気付かせ、自分から取り組めるようにする。</p> <p>・日々の習慣が確実にできていることを認める言葉かけをしていくことで、自信がもてるようになる。また、</p> <p>・次週に順番になり、上手や</p> <p>・当番活動が分かり、教師と一緒に楽しんでできるようにする。したくない嫌いな遊びには、無理強いをせず、できることから少しずつ体験できるようにする。</p> <p>・当番の順番が分かりやすいように掲示物で知らせる。</p>	<p>・心をもつようにする。</p> <p>・自分で紹介したりする場を設ける。</p> <p>・季節を感じたり遊びが広がったりするように、今している遊びや季節に関する絵本や紙芝居を選ぶ。</p> <p>・季節を感じたり、秋の喜びを感じたりできるようにする。</p> <p>・自分が使ったものだけでなく、みんなで遊んだ場所も片付けるように促し、整理するよに気付くようにする。</p> <p>・自分の身体を守るための様々な生活習慣について、養護教諭の協力を得ながら、必要理由について気付かせ、自分から取り組めるようにする。</p> <p>・日々の習慣が確実にできていることを認める言葉かけをしていくことで、自信がもてるようになる。また、</p> <p>・次週に順番になり、上手や</p> <p>・当番活動が分かり、教師と一緒に楽しんでできるようにする。したくない嫌いな遊びには、無理強いをせず、できることから少しずつ体験できるようにする。</p> <p>・当番の順番が分かりやすいように掲示物で知らせる。</p>
					<p>その他行事等</p> <p>・2学期始業式 ・避難訓練 ・バス遠足 ・なまよし遠足(真年輪活動) ・交通安全教室 ・祖父母参観 ・2学期終業式</p>			

①この時期の幼児は（幼児の発達の過程と特徴）→年間指導計画①

各期における幼児の発達の過程や特徴が示されています。そこでは特に、友達とかかわりについて、「仲間関係の様相（同年齢）（異年齢）」と記載しています（平成16～21年度研究「幼児の生活と仲間関係」より）。その理由として、平成25～27年度研究「遊び込む子ども」において、4、5歳クラスの遊び込んだ事例には仲間との協同の姿が必須であるということ、遊び込むことによ

て仲間とよりよくかかわる力が育まれることが見えてきたことが挙げられます。また、遊び込んだ事例には、年下の幼児の存在や年上の幼児のアドバイスが遊びを盛り上げる要因になっていることも多く、異年齢児相互のかかわりが欠かせないことも分かってきました。

そこで、当園のこれまでの研究成果に基づき、仲間関係が育まれる様相も念頭において遊びを援助することで、幼児が遊び込むことにつながり、教師の願いやねらいに近づけると考えました。

②こんなふうに育ってほしい（園生活の中で教師が期待する幼児の姿）→年間指導計画②

園生活の中で教師が期待する幼児の姿を示しました。（あ）と記載してある姿は「あそび」、（み）は「みんな」、（せ）は「せいかつ」における、幼児の姿や教師のねらいをもとにしてあります。ここに示した姿は、幼児にとって必要だと思われる体験を園生活において積み重ねていくことで現れてくる姿であり、各教育期における方向目標です。

記載されている幼児の姿のうち、（あ）と記載してある姿は、平成25～27年度研究「遊び込む子ども」において遊び込んだ事例に現れた幼児の姿をもとにしています。遊び込んだ事例に現れた幼児の姿をもとにしたのは、平成27年度研究において「遊び込みの空気に触れて変化した経験を積み重ねた幼児は、普段の生活でも変化が見られた」という結論を得たからです。つまり、遊び込む中でできたこと（友達に道具を貸してあげることができた、できるようになるまで粘り強く頑張ったなど）は、それを積み重ねることによって、その他の場面でもできるようになるということを示しています。また、遊び込むことによって「がんばる力」「かんがえる力」「よりよくかかわる力」「ことばの力」が総合的に育つのではないかということも見えてきました。（平成27年度研究より）

③だから教師は（各期における教師の援助と環境構成）→年間指導計画③

①に示した幼児の姿と照らし合わせて、各期における主な教師の援助や環境構成を示しました。平成26年度研究において、教師が日常的に大切にしている本園の保育の特徴や、遊んでいる幼児の内面に「意欲の持続」「気付き・思考の深まり」「自信・達成感」「仲間とかかわり合う心地よさ」が生み出されるように瞬時に判断して発している言葉かけなどが見えてきました。それらの援助は、日常的に心掛けていることや、幼児の遊ぶ姿を捉えて瞬時に対応しなければならないことであるため、期によって大きな変化があるものではありません。例えば、本園の保育の特徴として、「待つ姿勢」が挙げられます。教師は、幼児が自分の力で問題を発見したり、解決したりするまで遊びを見守り、待つ姿勢を心掛けます。遊び込ませようと先回りをしたり、教師が答えを言って解決を急がせたり、教師が思うように遊びの流れをコントロールしようとしたときは、遊び込みには至りません。幼児自身が強く心を動かされたときや、何とかしたいと切に願っているときでない、遊びは継続しませんし、仲間との協同も見られないことが研究から分かりました。しかし、ただじっと見ていればよいかというのではなく、遊んでいる幼児の内面に足りないものは何かを考え、「ここ、ど

うする？」などの課題を焦点化する言葉かけや、「なるほど」「すごいね」などの受容・称賛する言葉かけなどをします。

よって、この欄には、本園の保育の特徴も含めて、もう少し具体的に、各期の幼児の発達段階や遊びの内容に合わせた援助も示しました。各期における幼児の特徴や教師の願いを重ね合わせて、教師がこの期にどのような援助や環境構成をすることが大切かということです。例えば、その時期特有の幼児の発達段階に対する援助（3歳クラスのⅠ期の入園当初に心掛けることや、4歳クラスのトラブル期など）や、その季節にしか経験できない遊びの準備などです。

④「あそび」における「幼児は」→年間指導計画④

平成25～27年度研究「遊び込む子ども」における遊び込んだ事例から、当園での幼児の遊びの多くは、製作遊びやごっこ遊び、砂・土・水（冬は雪）を素材とした遊び、自然物や生き物にかかわる遊び、運動遊び（ルールのあるもの、達成的なものなど）などに分けられることが見えてきました。それらの遊びにおいて、幼児がひとやものとどのようにかかわるか、幼児の予想される遊びの姿や期待される学びの姿を示しました。

⑤「あそび」における「教師は」→年間指導計画⑤

各期の「あそび」における教師の援助や環境構成が示されています。内容や方針、扱う材料、留意点など、幼児の遊びを支えるために必要な事項を具体的に記載しました。年齢が上がるにつれて、幼児は園の環境に慣れ自発的に遊びを展開していくことができるようになるため、年間指導計画上は教師の援助が次第に少なくなる傾向にあります。

⑥「みんな」における「幼児は」→年間指導計画⑥

各期の「みんな」の時間における活動内容が示されています。緑の小道散歩、おやつ活動、ルールのある遊び、栽培、製作、プール遊び、異年齢活動など、主に季節感を味わったり集団で行う遊びを楽しんだりする活動を行います。各年齢クラスや季節によって活動内容が異なり、修了への準備や附属小学校との交流会など5歳クラスのみ活動もあります。これまでの指導資料等に基づいて内容が示されていますが、個々の育ちや「あそび」の様子に応じて、それらの活動は期の区分を越えて行われたり頻度が異なったりします。また、年齢クラスによって、「みんな」に含まれたり「せいかつ」に含まれたりする活動もあります。

例えば、おやつ活動は、活動内容や教師のねらいから、4、5歳クラスでは「みんな」に含み、3歳クラスⅡ期までは「みんな」ではなく「せいかつ」に含んでいます。4、5歳クラスのおやつ活動は、「あそび」の時間に収穫した園内の木の実を食べることによって季節感を味わったり、「みんな」の時間に栽培した野菜を調理して食べることによって収穫の喜びを感じたりします。3歳クラスでも教師は旬の素材を生かしたものを提供するよう心がけていますが、季節感を味わうというよりは、おやつを食べることをきっかけにして、幼児が午前の遊びに区切りを付け片付けることができるように促すことが多くあります。また、園は家庭とは違う集団で生活をするため、食べる時のきまりやマナーがあることを知り友達と楽しい時間を過ごせるようになることがこの時期に重視したいね

らいになります。したがって、3歳クラス児にとっておやつを食べることは、園の生活リズムを身に付けるという色合いが濃いため、Ⅱ期までは「せいかつ」に含まれ、次第に「みんな」に含まれるようになります。

⑦「みんな」における「教師は」→年間指導計画⑦

各期の「みんな」の時間に行う活動における、教師の配慮すべきことや準備品などの具体的な援助を記載してあります。活動内容は教育期によって大きく変わらなくても、幼児の実態に応じて教師のねらいや援助が異なることがあります。例えば、4、5歳クラスでは年間を通じてルールのある遊びを行います。幼児の発達段階や「あそび」の様子に応じて、教師が提案する遊びが異なったり遊びは同じでもルールや活動場所が異なったりします。

⑧「せいかつ」における「幼児は」→年間指導計画⑧

各期において、教師が幼児に身に付けてほしいと期待する生活習慣や行動が示されています。クラスの当番活動なども含まれます。3歳クラスは初めての園生活になるため記載内容が多くなりますが、年齢が上がるにつれてそれらの内容はおよそ身に付いてくると予想されるため少なくなります。また、3歳クラスⅡ期終わりころまで（7月終わり）は、園の生活リズムに慣れるというねらいから、おやつを食べることや帰りの集まりは「せいかつ」に含まれますが、次第に「あそび」の時間との関連が深まってくるため「みんな」に含まれるようになります。

⑨「せいかつ」における「教師は」→年間指導計画⑨

各期において、教師が幼児に身に付けてほしいと期待する生活習慣や行動を、どのように促したり環境を整えたりするか、具体的な援助の内容が示されています。3歳クラスは初めての園生活になるため教師の援助が多くなりますが、年齢が上がるにつれてそれらの内容はおよそ身に付いてくると予想されるため、指導計画上での援助は少なくなり個別に対応していくことになります。

■研究成果の発表状況

- ・ 1年目の成果については、平成28年10月5日に本園において第24回幼児教育研究会を開催し、上述の成果を発表した。また、平成29年3月に研究紀要を発行した。
- ・ 2年目の成果については、平成29年10月11日に本園において第25回幼児教育研究会を開催し、上述の成果を発表した。また、平成30年3月に研究紀要を発行した。

■学校現場や授業への研究成果の還元について

新潟県教育委員会主催の保幼小合同研修会、県立教育センター主催の幼稚園等新規採用教員研修、本学の学習場面臨床学の現地指導等において、本園職員が講師または指導者として参加し研究の成果を伝えた。来年度も、全国国公立幼稚園・こども園教育研究協議会での事例発表や新潟県教育委員会主催の幼稚園等新規採用教員研修の保育参観研修の指導者として、研究成果を還元していく予定である。